

“面白く、身近に” シチズンシップ教育・ 基本のキ

特定非営利活動法人ど・あっぱ！代表理事

築山美樹

私たちは「シチズンシップ教育」を
目指す市民団体です。「市民として何
かできることがあるのではないか？」
ということ、一人ひとりが少しずつ
意識し、少しずつ行動していくことが、
私たちの目指すシチズンシップである
ように考え活動が続けています。

第3の公共という概念で、NPO法
人などに焦点が当てられるようになって
きましたが、公共を担うまでの団体
に成長するには、経済性、継続性、リ
ーダーシップ性を含め、安定した
運営が可能な、ある程度大きな組織が
求められます。これはとても重要で、
これからのこの国には必須となる枠組
みだと思えます。しかしその前に、も
っと一人ひとりの小さな単位で、公共

性を根づこに持つ市民の存在があれば、
それほど大ごとではなく、お金の有る
なしにかかわらず、どこでも、簡単に、
短期間に、豊かな街づくりの一端を担
えるとも思っています。私たちは、そ
んな、身の丈にあった小さな小さな公
共意識の醸成を目指す団体です。

こんな私たちの活動の紹介と、その
根底にある民主主義の考え方や海外事
例、そして今後の課題などをお話しさ
せていただきたいと思います。どうぞ
しばらくお付き合いください。

「NPO法人ど・あっぱ！」とは

私たち「NPO法人ど・あっぱ！」
(Do Up!)は、2007年に
法人格を取得した横浜を拠点に活動す

る市民団体です。メンバーは、毎日通
勤電車に揺られる会社員、子育てに奮
闘する主婦、試験直前にノートのコピ
ーに忙しい大学生など、いわゆる普通
の社会人です。「ど・あっぱ！」は、「市
民度あっぱ」と「DO UP」の意味
を込めて名づけました。市民としての
意識や役割を「市民度」という造語で
表し、それをアップさせる活動を目指
して、主に子ども達を対象に活動して
います。

多様性と公共性を併せ持つ 市民がいい！

21世紀に入り、この国は成長社会か
ら成熟社会へと移行し、市民の生活ス
タイルや家族構成も変化してきました。
成熟した社会は個人一人ひとりの価値
観や、多様性が重視される時代です。
であるならば、同時に公共という意識
も、バランス良く持ち合わせる必要が
あると私たちは思います。

もはやどこかの政治家が言うように、
理想的な家族はこうあるべき、などと
いうような、模範となる価値観を誰か
が示すような時代ではないと実感して
います。多様化が進めば、模範に当て
はまらない市民がどんどん増えていく

時代だからです。個々人の多様な価値
観や理想像を重んじ、同時に公共性も
重んじる市民がたくさんいる社会を目
指すこと、これが、これからの豊かな社
会づくりに建設的に取り組む柔軟な発
想ではないかと、個人的には思います。

土台はやっぱり民主主義

しかし、個人の価値観や多様性を重
視しながらも、公共性を考えることは、
時としてたやすいことではありません。
それぞれの利害が対立することがある
からです。

そこで、「民主主義」を考えること
が重要になってきます。利害が対立す
る場合のコンセンサスの取り方などを
含みます。ここで重要なのは、「正解
や間違い」という発想ではないという
こと。利害が対立する意見だからとい
って、間違いではなく、自分が主張す
る意見と価値は同じである認識を両者
が持つ必要があります。そこからのス
タートで、議論が始まらなくては民主
主義とは言えないと思います。そして、
どちらが正しいか、間違いかを議論す
るのではなく、いかにお互いが納得し
たかを議論することこそが、民主的だ
あるのだと思います。

海外では、民主主義の教育が進んでいます。例えば「模擬選挙」。日本では、やっと最近一部の高校等で実施されてきているものの、まだまだ「模擬選挙」偏向した政治教育」を懸念する議論も起こります。しかし米国では小学校から模擬選挙を行う州もあり、NPOをはじめ、マスメディアも子供向けの教材や情報を積極的に提供しています。少しご紹介させていただきたいと思います。

海外の民主主義教育例

米国ではシビックエデュケーションと呼ばれる、民主主義教育のカリキュラムが存在します。その一つとして模擬選挙も取り組まれています。米国のシビックエデュケーションは、各州にその実施が委ねられており、内容は一律ではありませんが、実施が進んでいる州の中には、小学校から模擬選挙が行われているケースもあります。

もちろんただ投票行為をするだけのカリキュラムではありません。横江公美氏著『判断力はどうすれば身につくのか』には、シビックエデュケーションとして、「一票の重み」や、「内容を知らないで投票することの恐ろしさ」、

「意思決定のプロセス」などを、学年にあわせた内容で学ばせていくカリキュラムが紹介されています。例えば小学校高学年で学ぶ「意思決定プロセス」では、意思決定に必要な情報の収集方法からはじまり、収集した情報の信憑性確認、意思決定などの一連のプロセスを経験させるカリキュラムが組まれています。さらに、他の人との意見の違いを受け入れた上で、最終的に「自分もそう思う」ではなく、「自分はこう思う」と、自分の意見を明確にするトレーニングも行われています。

ここはとても重要なポイントだと私は思います。自分が考え抜いた主張をきちんと持つということとは、同時に、他の存在を認識し、認めることの大切さを知ることにつながると思うからです。

このような内容からもわかるとおり、模擬選挙を取り入れたシビックエデュケーションとは、特定の政党支持や偏向した政治的思想教育とは全く内容を異にするものです。社会参画ができる一人前の市民に成長するために必要なプロセスを学ばせ、スキルを身につけさせる教育で、主として公立学校で行われているものと言えます。

このような、市民の社会参画育成プログラムとも呼べる民主主義教育を、大人になるまでに受けた者と、そうでない者では、大人になってからの市民の意識は大きく異なるだろうと私たちは思いますが、皆さんはいかがでしょう。

「ど・あつぷー」の活動

私たち「ど・あつぷー」は、公共の意識を持ち、問題を他人事にせず、自ら問題解決のために行動できる市民が一人でも多くなることを目指しています。そのためのも必須スキルとして、「知る」「考える」「判断する」「行動する」ためのスキルが必要だと考えています。

現在私たちは、学校の先生方の協力をいただきながら、総合的学習の時間などに、オリジナルの面白ワークショップをさせていただいています。

米国の事例でもわかる通り、シビックエデュケーションなどは本来、義務教育の期間にわたって、子ども達の発達レベルに合わせて、段階的に学習させるカリキュラムであると認識はしていますが、現実問題として、今の日本の学校には、そのような時間的余裕は

ありません。そのため、総合的学習の時間で行えるように、1時間で終了するワークショップをいくつか用意しています。例えば「税金」「選挙」「コンセンサスを取る方法」「メディアリテラシー（情報の質を考える）」等。勿論これらのワークショップを1時間体験したからといって、子ども達に劇的な変化があるわけではありませんが、やらないよりはやった方がよいという信念で頑張っています。

「面白い」が一番！

しかし、そうはいつても、少ない時間で、少しでも印象的であるよう、いくつかの工夫をしています。

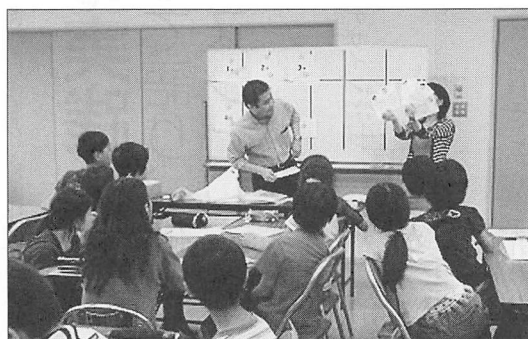
一つ目は、「とにかく面白い」ということ。「ど・あつぷー」が最も重視するポイントです。時には、スタッフが役者になって寸劇を行い、そもそも「なぜ選挙に行くのか」「クイズ形式で出題したり、みんなが捨てた少しのゴミが、積み積み積もってゴミ怪獣になって暴れだすなど、「面白さ」にこだわったワークショップ作りを試みています。

「身近」が二番！

二つ目は、「身近」であること。民



みんなの捨てたゴミが怪獣になって暴れだす！「ゴミ怪獣ワークショップ」



「サザエさんワークショップ」の様子。キャラクターの説明は、カードを配って解説する。

主義・選挙・政治・公共・税金…などをテーマにすると、子ども達の生活からどんな話が遠くなり、その分、関心が薄れてしまいます。そこで、できるだけ身近な作業や、固有名詞をふんだんに登場させ、テーマを考えるよう工夫しています。

例えば、「税金」の時は、子ども達が、朝起きてから寝るまでの間、自分に使われている税金や、自分が払っている税金の金額を計算する内容を考えました。また、「議会や政治の仕組み」などをテーマにしたワークシヨップでは、サザエさん一家が家族会議でお弁当のメニューを決めるという設定にし

ました。一連の流れは、議会の仕組みに似ていて、決して難しいものではないことを体験してもらい、公に対する興味や理解が少しでも深まることを期待しての内容です。

また、このサザエさんのワークシヨップでは、子どもにサザエ一家のキャラクターになりきってもらいながら進めていきます。自分とは異なる年代や性別になりきること、立場が違えばニーズも異なり、利害が対立することを実感してもらうためです。例えば波平役の子は焼き魚を、サザエ役はカロリーの低い豆腐ハンバーグを食べたいと主張します。そんな違いを実感しな

がら、最終的にサザエ家のメニューをコンセンサスを取りながら決定させる内容です。

体験した子ども達の反応も上々で、最後まで飽きることなく、時間のギリギリまで、家族会議を続けてくれます。

見えてきた課題

私たち「ど・あっぷ」は2006年から活動を開始してきましたが、社会人がこのような活動を行うにあたって、いくつかの課題が見えてきました。まずは、現場の先生の負担についてです。

これまでいくつかの学校でワークシヨップを実施してきましたが、公立学校の先生は、授業以外にも、やらなくてはならない仕事が大変多いということがわかりました。そして多くの場合、お一人お一人の単位で活動されています。そうすると、私たちのプログラムに興味を持ってくださった先生がいらっしゃったとしても、たったお一人、外部と連携する授業を企画し、準備することになります。学校内部の調整も、場合によってはかなりハードになるように、準備の時間が確保できないことを理由に、実施を断念してしまわれる

ことも起こってきます。誰でも簡単に、手軽に、負担が少なく、私たちのプログラムを使ってもらえるようにすることが、今後の課題と考えています。

課題の二点目は、先生方との接点の問題です。私たちのような会社員や学生は、休日に活動しなくてはなりません。もちろん、授業中に行う平日開催のワークシヨップの場合には、有休をとったり、空いている人間がフォローをしますが、教員向けの講演や勉強会、イベント等は、通常は土日に行います。

一方、先生方は、部活動などもあるせいか、休日開催のイベントでも、あまりご参加はいただけません。どのようにしたら、学校の先生方と接する機会が得られ、我々を知ってもらえるのか、私たちにとってはかなり重要な問題です。また、このような、学校とNPOとのマッチングの問題は、全国的に共通した問題とも言えるようです。

このようなことから、民のパワーを学校につなぐコーディネーターの役割が、教育界においては重要になるのではないかと、実感しています。今後は、地域の大学や教員OBなども連携を図り、このような問題解決を模索していきたいと考えています。